

星へ

浅岡美月

薄い空気の層に一番近かった星が沈んだ
昼の余熱を吸い込んで
小指の爪より遠い星をつなぐ
光ですら何千万年かかることを知らないで
指先でいたずらに
羊皮紙に描かれた形が
月の向こうを流れている
天球に遠い星が満ちていたとき
首長竜たちがそれを見上げていた
星の中で生まれた元素が
死と共に流れ
土の上に集まり
自分たちが生まれたことを知らないで
足の指に絡んだ砂粒は
何億年も前
涙膜を通り過ぎた星の遺骨
それは髪になって
舌に擦れる歯になって
喉を湿らす吐息になった
薄い空気の層に星が近づいてくる
天球をなぞる指先を
私はこうして死んだのだよと
古い光がにわかに削る
つながれた星の形は

羊皮紙の上と随分変わったのだと
欠けた爪先も知らないで